



東近江市環境円卓会議 IN 奥永源寺

みんなで語り合う東近江の森「いま」と「これから」

実施報告書

日 時：平成30年12月19日（水）19:00～21:30
場 所：永源寺コミュニティセンター もみじホール
主 催：東近江市環境円卓会議 運営委員会
鈴鹿の森おこし推進ワーキンググループ
（事務局：NPO法人まちづくりネット東近江、東近江市市民環境部生活環境課）
共 催：東近江市

（報告書作成）

東近江市環境円卓会議運営委員会

【報告】 みんなで語り合う東近江の森。「いま」と「これから」 東近江市環境円卓会議

■日時：平成30年12月19日（水）19:00～21:30

■主催：東近江市環境円卓会議運営委員会、鈴鹿の森おこし推進ワーキンググループ

■場所：永源寺コミュニティセンター もみじホール

■着席者数：9名（提案者、司会、記録者含む）

■お問合せ：東近江市市民環境部生活環境課

■来場者数：52名（永源寺住民、行政、NPO、市民等）



提案者 水田 有夏志 氏（「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ）

～みんなで語り合う東近江の森。「いま」と「これから」～

東近江市の面積の56%を占める森林は、本市の地域資源として重要であるとともに、鈴鹿山脈をはじめとする市域の東部に広がる森林は「鈴鹿国定公園」に指定され、イヌワシやクマタカが生息する豊かな自然があり、木地師発祥の地として古くから森林文化を育んできました。

また、鈴鹿山脈や里山の多くは、人と関わりながら育まれてきました。しかし、ライフスタイルの変化に伴い、森林を取りまく環境は大きく変化してきています。

そこで今回、地域の森林に関わる様々な分野の人に集ってもらい、東近江市の森林の現状と今後の可能性を考える東近江市環境円卓会議を開催します。円卓会議では、森林所有者、東近江市永源寺森林組合、びわ湖の森の生き物研究会などの関係者がそれぞれの立場で語り合い、森の現状と可能性を関係者や参加者の皆さんと共有し、今後の森づくりの視点を探ります。

出演者



水田 有夏志
鈴鹿の森おこし推進ワーキンググループ



川嶋 富夫
森林所有者（箕川町）



落部 弘紀
東近江市永源寺森林組合



山崎 亨
びわ湖の森の生き物研究会



池田 則之
愛知川上流漁業協同組合



丸橋 裕一
河辺いきもの森



今井 康太郎
鈴鹿10座エコツアーガイドクラブ

■円卓会議の出演者の皆さんから

テーマ提案：東近江の森の「これまで」と「いま」

話題提供：水田 有夏志（「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ）

（これまで）

- これまでの森林・林業行政は、国や県の主導のもとに進められてきた。
- 森林法は強い法律で、森林の無秩序な伐採を防ぐための規制が盛り込まれている。
- 森林資源の管理についても、森林法に基づく森林計画制度が定められている。
- 林野3公共事業（治山、林道、造林）の予算を国が配分し、県が実行部隊として進められてきた。
- 国の政策は、全国一律である。例えば拡大造林政策が打ち出されると、スギやヒノキの一斉造林が全国的に広がった。それが一段落すると環境重視ということで、複層林や天然林施業がもてはやされた。現在は森林資源を利用する林業成長産業化政策によって、合板や集成材向けの生産を国を挙げて進めている。
- 政策の企画・立案や実行は、林野庁や都道府県の森林部局の人達、あるいは造林公社や森林組合の人達など、林業関係者だけで進められてきた面が多いと思う。
- いろんな政策や事業は国の補助金を活用してきたが、その採択基準については、林業先進地であること、また、規模や効率が優先されてきた。

（いま）

- 東近江市の林野率は56%で県平均よりもやや多い。
- 東近江市の人工林率は34%で県平均よりも低く、天然林が多い。
- 東近江市の森林の所有形態は、個人が最も多く、会社、社寺、公社、集落などが続き、県営林、市営林、国有林などはあまり多くない。
- 鈴鹿の奥山から、布引丘陵や箕作山などの里山、愛知川の河辺林、そして、愛知川を通じて琵琶湖へ水が流れ込む。こうした森・里・川・湖のつながりがある。
- 特徴的な森林が存在している。例えば、御池岳の山頂には「21世紀に残したい日本の自然100選」にも選ばれたオオイタヤマメイツ林、御池岳のT字尾根のブナ林、日本コバのモミ林、竜ヶ岳の太尾のアカガシの森などがある。
- 豊富な森林資源がある。奥永源寺には立派なスギ林やヒノキ林があり、それらが成長し、人工林資源としていよいよ利用できる段階に来ている。広葉樹資源も豊富で、東近江市永源寺森林組合では、広葉樹を資源として利用する取組が進められている。
- 木材としての利用だけではなく、鈴鹿10座とエコツーリズム、溪流魚の養殖と溪流釣り、キャンプとシャワークライミングなど、多様な森林の利用も行われている。
- 奥永源寺は「木地師のふるさと」とも言われる独自の森林文化があり、玩具や家具などの木工作家も活躍され、木を使う文化が継承されている。

(現在の課題)

- 成熟しつつある人工林資源を有効利用していくことが必要。
- 獣害や豪雨等により劣化した森林を回復し、自然環境や生物多様性の保全に配慮した森林づくりを進めていくことが必要。
- 森・里・川・湖のつながりなど、東近江市の森林・林業の強みや特性を活かしていくことが必要
- 合板、集成材などの大型工場への一方通行的な木材流通が主流になっているが、地域でモノ（資源）やカネ（資金）が回る仕組みを作る必要がある。
- かつては、山に多くの人が入り、炭焼を行うなど、森林・林業と人の暮らし・文化との関係が密接でしたが、その関係が希薄化しており、さまざまな資源の活用を通じて、その関係を取り戻すことが必要。
- 子どもたちや一般市民がもっと山に入り、自然への理解や生きる力を育む機会を増やしていくことが必要。
- システム的な課題として、国や県だけに頼らず、地域の実情に応じた森林政策を地域主導で進めていくことが必要。
- 従来型の森林・林業、いわゆる木材生産だけではなく、多様な考え方を取り込んでいくことが必要。

(これから)

- こうした課題を解決し、東近江市の特性を活かした森づくりを進めていくため、「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループを今年の1月に立ち上げ、関係者が集まって議論しながら、いろんな取組みを進めている。
- このワーキングのミッションは、まず、東近江市の今後100年に向けた森づくりビジョンの策定、もう一つのミッションとして、ビジョンの策定を待って動き出すのではなく、できることから始めようということで、「鈴鹿の森おこし」を推進する実践活動として、「あらゆる場面に木を使うプロジェクト」と「東近江市らしい新たな森づくりプロジェクト」にも取り組んでいる。
- 森づくりビジョンのスタンスとして、地域（ローカル）の視点で森林・林業を考えようということ。国や県任せではなく、目の前の森林の課題は、それをいつも見ている地域の人達が、自分たちでどうするのかを考えていくべきではないかということ。
- 次の100年先の未来を見据えたビジョンづくり。100年先を見通すことが難しいが、森づくりはその時々々の社会経済情勢だけに振り回されるのではなく、百年の計を持って、地域の人達が思いを引き継いでいけるような仕組みが必要。
- 次にプロセスの重視と柔軟な対応。ビジョンの策定や実践活動を行う場合、その過程、プロセスを重視することによって、「自分ごと」として捉えてもらう。また、国や県の政策にありがちな同時的、均一的な進め方、あるいは一度決めたら変えにくい、硬直した進め方ではなく、地域の実情や状況の変化に応じて柔軟に対応していくことが重要。

- 東近江市の特性であり、強みでもある森・里・川・湖のつながりを活かして、例えばエコツーリズムなどの取組を発展させながら、水の流れやモノの移動のつながり、人と人とのつながりの復活を目指した森づくりを実践していくことが必要。
- 最後に、森林・林業＋X（エックス）。これは木材生産など、従来型の森林・林業だけではなく、登山やエコツーリズム、教育や福祉、医療まで含めたあらゆる可能性、あらゆる価値をエックスとして付加して、森づくりに積極的に活用していこうという考え方である。
- 森づくりビジョンを推進していく仕組みとして、東近江100年の森づくりワークショップを考えている。

セッションⅠ 森の「いま」を知る

【森林所有者：川嶋 富夫（東近江市箕川町）】

（所有している森林の状況について、制約条件がなかったら山をどのように管理したいですか）

- 先代が残した300年生程度の山を所有。
- 住んでいる箕川では人工林率が80%近い森林面積となっている。
- 永源寺は80%が人工林率。今まではそれを誇りにもってやってきたが、今は杉、ヒノキの価格の低下、次に獣害みたいな悪い形。これは、林業、要するに木材の低迷がこういう風にしてしまったのではと思う。
- 現実に、木材さえ高級品化してくれるようになったら状況は変わる。
- 先代が残した300年生の山は、持っていては無駄ではないが、今現在では間伐ぐらいしかできない。
- 森林組合が人工林の間伐をしてくれて、現在箕川の集落では60%の間伐をすすめている。このため、山津波は箕川では起こらないと思う。
- 木は売れないが、山に力を与えていけば、あと残り100年の経済効果は出ると思う。現実、今持っている山は300年、それにプラス100年、400年はひとつも怖くはない。それは、これからの木がいかにもってくれるか。
- 所有している20年間、植林がほとんどない状態。林業が軽減されているから。切りたいけど売れないという最悪の状況。これからは森林組合を頼って、間伐はどんどんやっただければと思っている。うちの集落のように、間伐率を60%にしていれば、山も捨てたものじゃないと思う。
- 昔の木はシロアリにやられない。適期に間伐していたので、なおしたところがシロアリにやられることが現実にある。
- 山の利用価値を見直したい。

（その制約条件や今後の森林管理の課題について）

- 木自体は持っていけば売れるというのが現状。
- 先般、友人がヒノキをたくさん持っている。それは売れにくい。ただ杉もばかにしたものじゃないという話をしてくれる。全く売れないというのではなく、需要の仕方だと思う。

家屋に使う木ではないということで売れる。

【森林管理者：落部弘紀（東近江市永源寺森林組合）】

（東近江市永源寺森林組合とは）

- 組合員さんの出資を基に設立された組織。旧永源寺町の森林所有者の大半が組合員である。
- 近年は、里山地域の森林整備をさせて頂いており、旧八日市市、五個荘、蒲生地域にも拡大した。
- 森林組合は、組合員から委託を受けて、組合員さんに成り代わって山林の仕事をする。
- 様々な補助事業を活用することで組合員さんが有利に林業経営できるよう活動している。
- 森林組合には、高い林業技術を持った職人さん、請負業者さんを抱えている。
- 近年では林業に特化した重機、木材運搬トラックを所有しており、木材生産を目的とした搬出間伐の作業を重点的に実施している。

（現在の取組み）

- 過去の施業の変遷 平成22年度に地球温暖化防止対策の一環として、上乗せ補助金、森林吸収促進交付金28,000円/ha、間伐に係る森林所有者の負担金が0円となった。間伐のほとんどが切捨て間伐。
- 平成20年度頃から搬出間伐にも取組み始めた。木材生産量は約2000m³。
- 平成24年度 約3,000m³、補助金制度が大きく転換する。森林施業計画制度から森林経営計画制度へ、旧永源寺町区域で一つの5ヶ年森林整備計画、0.1ha以上の施業から補助金が受けられた。森林経営計画制度は、林班、小流域約50haの山林のまとまりについて5ヶ年の搬出間伐計画を立てる必要がある。補助金を受けるには、5ha以上の搬出間伐を実施し、木材生産量に応じて補助金額が変わる。
- 平成25年度約3,000m³、平成26年度約5,000m³、平成27年度約5,000m³、平成28年度約7,000m³、平成29年度約7,000m³、平成30年度約7,000m³計画 平成31年度10,000m³（目標）。
- 近年は、木材生産量を増やせ、間伐面積を増やせ、新規造林地を増やせというような林業施策がとられている。木材自給率は近年、急激に上昇しており平成29年は36%、7年後には50%を目指す。戦後の拡大造林期に植林されたスギ、ヒノキ林が非常に多く、40年から50年生の人工林ばかりである。若い人工林が少なく、林齢の偏りが著しいため、スギ、ヒノキの植林も推進されている。滋賀県では、新規植栽施業について上乗せ補助金を設けており、植栽と獣害防護柵設置について森林所有者の負担金無しで実施できる。
- 森林組合は、現在、木材生産量を増加させるための搬出間伐、事前準備の境界明確化、山林の団地化、新規植栽地の開拓等の事業を強力に推し進めるため、目の前の仕事を必死でこなしている状況にある。

（理想とする森づくり）

- 国や県が補助金制度を活用して推進する木材生産や新規植栽活動を実施することは、もちろん必要である。当面の仕事を作って、それを片付けていく現在の状況は長続きしない。

健全な森づくりにとっても好ましくない。植栽してから収穫するまで、40年あるいは長期的に80年、100年の年月がかかる。一世代では完結しない生業なので、後世に引き継ぐ必要がある。東近江市について、下流域から上流域、水源林まで非常に多様な環境が存在する。気候や降水量、土質、地形も様々。スギにしてもヒノキにしても優良材を生産するための適地がある。植栽しても育ちにくい土地もある。人が作業するのに危険な斜面もある。伐採して搬出作業を行うのに効率が悪く、採算が合わないエリアもある。希少な動植物の生息環境は保全すべきである。登山やレクリエーション活動にも配慮すべきである。将来的に東近江市においてどの程度の木材生産量を見込むべきかシミュレーションした上でスギ、ヒノキ人工林面積を調整することが望ましい。木材生産を目的として造るスギ、ヒノキ人工林は、作業の効率化から面的なまとまりがあった方が望ましい。

- 現在では、これらのことを踏まえた長期的な方針や計画が存在しない。まずは、東近江市の森林をゾーニング、ランドデザインする森づくり計画を立てる必要がある。

(森林管理の課題)

- 先人の方々のおかげでスギ、ヒノキの木材資源は十分に存在している。現地での境界が不明確であるため、間伐して木材生産が可能な山林があるにもかかわらず、手がつけられない山林が非常に多い。境界を明確にしようと補助事業を活用して数年前から取り組んでおり、少しずつ進んでいる。しかし、スムーズには行かない。ご自分の所有山林の境界が分からない、分かるけど体力的に山へ行けないなどのケースが多い。手間と時間がかかる。境界明確化できた情報は、森林組合だけでなく東近江市とも共有し、今後役に立てる必要がある。同じGISによる情報管理が必要。
- 森林組合では、事務員や作業員の人手不足により、意欲ある山主さんの要望に十分に答えられていない。特に作業員については、今後、高齢によるリタイアはある。新規就業者もなかなかいない苦しい状況。
- 山林を手放したいと考える森林所有者について、木材生産に適した山林ならば森林組合が買取り、森林組合が所有して森林経営を行うべき。木材生産には適さない山林については、天然性林として自然にまかす方針、あるいは、森林整備を実施して天然性林へ誘導する方針で東近江市が管理すべき。(森林経営管理制度H31年4月1日施行)

【森の生き物：山崎亨（びわ湖の森の生き物研究会）】

(鈴鹿の山と生き物の変化)

- 42年前に滋賀県で初めてイヌワシの生息を確認したのが、この永源寺。それ以来42年間、鈴鹿の山に入り続けている。
- この間に、非常に大きな山での変化が起きていることを実感している。
- 42年前は鈴鹿山脈にイヌワシが、6つがいたが、現在は1つがだけ。
- 森の生き物を一言でいうと、鈴鹿の森は生物の多様性に非常に富んでいる。植物の種類数が1,800、植物の種類が豊富だと言われる伊吹山でも1,300。これは地理的な要因

が非常に大きい。

- 北日本と南日本の両方の自然環境要素がある。日本海側気候と太平洋側気候が入り混じっている。地形が非常に複雑で、多様な地形が存在している。
- 一番大きな要因は、人々が森林資源を大昔、平安時代ぐらいから、持続的に利用すべく多様な管理をやってきたところ。
- 結果として生物多様性が鈴鹿山脈には非常に豊富だということ。したがって、そこにはいろいろな生物が棲んでいる環境になっている。
- 嫌いな生き物もあれば好きな生き物もある。すべてが鈴鹿の森の生き物たち。

(イヌワシ・クマタカが生息する森とはどんな森)

- 東近江市は鈴鹿山脈最高峰御池岳から愛知川を経て琵琶湖まで、一連の森里川がつながっているまち。
- 君ヶ畑の天狗堂 988m、藤原岳に天狗岩、佐目子谷にも天狗岩があるが、この天狗というのは実はイヌワシを擬人化したもの。
- 東近江の森は「天狗の森」であると言っても過言ではない。
- イヌワシとクマタカは東近江市の森の守り神。指標生物。イヌワシもクマタカも棲めるというのは、非常に多様性に富んでいるということ。
- こういう資源を人々が持続的に利用して、ある意味、豊かな生活ができてきたのかなと思う。
- イヌワシの棲む森づくりということで、去年のローカルサミットからテーマにしているが、イヌワシの棲む森とはどういうものか。
- かつて、イヌワシが生息していると木を切つてはいけない、森に立ち入らないという風に思われていた。まだそう思っている方々がたくさんいる。それは全く逆。人々が住めるからこそ、イヌワシが棲めるということをきちんと把握する必要がある。
- 多様な森がイヌワシを守ってきた。イヌワシはもともと開放地の猛禽なので、夏に獲物がとれる自然開放地、例えば石灰岩のカルスト地形や、成熟した夏緑広葉樹林、森林のギャップや林縁部。もう一つ重要なのが、人が作った開放地。かつての炭焼き、茅刈り、採草地、杉を育てるための伐採と更新。こういったものがなければ、イヌワシは棲めなかった。
- クマタカは森林性の猛禽、熱帯雨林の大型の猛禽。森に棲んで大木に営巣する。この写真の巣は、地上から30メートルぐらいのところ、天然の杉にある。だいたい、地上から25～30メートルに巨大な巣を作る。
- クマタカは森の中の色々な生物を食べている。これを言い出すときりがない。タヌキ、リス、テン、カモシカの幼獣、トカゲ、小鳥などという風になんでも食べる。つまり多様性に支えられている。サルのみイラが巣の中にあつた。最近ではニホンジカの子どもも。ニホンジカが増えて、やはり嗜好するものがあるということでシカの子どもも巣の中に持っていく。というぐらい、クマタカは多様性に対応していることがわかる。

(イヌワシ、クマタカの生息における鈴鹿の森の課題)

- かつて鈴鹿山脈に6つがい、ペアのイヌワシがいた。それは人々の生活とともに生きていた。千数百年、日本人とともに生きてきた。ところが現在1ペアしかいない。2006年からの10年間ではたった3羽しか巣立っていない。2010年以降は1羽のイヌワシも巣立っていない。
- 今日ここで言うのは本当につらいが、東近江市にいたイヌワシ1つがいが、実は去年の秋からいなくなって、現在いないという状態が続いている。
- 1980年代の永源寺。ここにダムがあるが、1987年9月20日はこんな状態。伐採地、伐採したばかりのところ、木を植えて大きくなってきたところ。これは銚子ヶ口から天狗岩にかけてのところ、伐採地がいっぱいあって、幼齢林がいっぱいある状況。この伐採地に杉が生育して、残念ながらそれが伐採されずという状態が続いている。これが全部、イヌワシにとっては狩りができる場だった。
- 実際にイヌワシが狩りをしているところの写真。伐採して、そのあと再生林をして、まだ幼齢な杉。こういうところで実際に物をとっていた写真が残っている。
- ここが茅刈り場。かつてはこういうところが残っていた。ところが現在は全部杉林になってしまって、焼き畑であったところも全部杉が植えられてしまった。植えるのは当然良いが、手入れができないところまで植えてしまったことが問題。これは経済的な価値もないし、山も荒れるし、光が射さないので、生物、植物も生えず、多様性が全く失われてしまったところが散在しているのが現状。
- イヌワシの棲む森というのはどういうところなのか、鈴鹿山脈では非常に多様な地形がある、多様な気候環境があるということで、場所も様々なところがある。その場所ごとの自然力というものが発揮される、多様性に富んでいる、一律な管理、マネジメントではなく、そこにはその適した森林管理というものが要だと思う。
- 成熟した夏緑広葉樹林が非常に重要。そして資源。もう一つは何のために植えたのか。やはり集材するため。生育した人工林というのはちゃんと集材して再生林していく、主伐更新というのがなければイヌワシが生きられない。
- 人為的な開放地については、今頃、炭焼きや誰も茅刈り場をつくらうとしない。どのような形で人為的な開放地が作れるか、多面的な森林の持続というものを考えなければいけない。それはプラスエックス、アルファの面で考えなければならない。
- 一律的な管理は多様性を低下させる。その結果としてイヌワシが絶滅の危機にある。したがってイヌワシの棲む森とは、日本人が持続的に森林を利用することができた、そのバランスがとれた多様な、そして豊かな生産性を持つ森林ということが、イヌワシの棲む森づくりにつながる。
- イヌワシのために森を作るのではなく、人が様々な形で総合的な森林の資源力を発揮させられるようなものが取り組まれば、イヌワシが棲めるという風に思っている。あくまでもイヌワシやクマタカは健全な森、我々人間生活にとって豊かな資源の場であることの指標であると思っている。

【溪流と森：池田則之（愛知川上流漁業協同組合）】

（鈴鹿の山と溪流の変化）

- 昭和30年代ぐらいから植林が進み、広葉樹を伐採しながら針葉樹の植林をした。最初のうちはよかったが、10年、20年経つてくると、下草がだれていき、山の保水力が無くなって、水分が落ち込んできた。
- 大雨が降ると山が崩れ、いたるところで山の崩落が進んだ。それにより河床に大きな淵や滝が無くなって、非常に魚が棲みづらい状況になってきた。
- それを防ぐために河川改修、砂防工事、護岸工事、色々が行われたが、それが逆効果という状況になってどんどん山が崩れている。そこにシカや獣が下草を食べるということで、一層、山と河川が荒廃して現在になったということ。
- 今も色々な工事や事業が行われているが、これといった成果はほとんど見られず、河川はますます悪化していくというような状況。

（イワナ、アマゴが生息する溪流を育む森とはどんな森）

- イワナ、アマゴを育む森は、イワナ、アマゴだけではなく、すべての生物、植物、昆虫も動物も、イワナやアマゴも含めた中でのバランスというのが、山にとって一番大事だと思う。
- バランスを保っている山がこういう状況になってくると、例えばイワナ、アマゴだけを放流すればどんどん育つということではなく、すべての物が山に命をもらって、育っていかなければ、イワナ、アマゴが生息する溪流を作るといことはかなり難しいと思う。
- まず、崩落しやすい杉やヒノキの植林をどうやって、バランスのよい広葉樹と混じり合ったような天然木を増やししながら、昔の山にしていけるかというのが、一番溪流を生き返らせるためには大事だと思う。

（イワナ、アマゴの生息における鈴鹿の森の課題）

- 荒廃した奥山をどうやって復旧するのかという話を良く聞くが、近くの山は少しずつでも色々な手入れをして、直してもらっているが、奥山については全く手つかずで、奥山の話自体をすることがタブーみたいな状況になってきていると思う。
- できれば奥山をどうやって復旧していくのかと、せめて話題を作っていって、少しでも意識を変えていくことが大事だと思う。
- 溪流は溜まった土砂が動かず、じっと溜まっているので、それを何とか撤去することが唯一ではないかと思う。
- イワナの養殖を50年ぐらいやっているが、最初、イワナは養殖できないと、野性味が強くて警戒心が強いので、そのイワナを人工養殖することはできないということだったが、昭和40年代ぐらいから父親がやり、私が継いでいるが、色々と研究を重ねて、今では90%以上の確率で養殖ができるようになった。1年間で30万匹ぐらいのイワナをつくって、20万匹ぐらいは河川放流している。うちに来てもらったらわかると思うが、その警

戒心が強いイワナが、池で、群れで泳いでいる。餌をやると寄ってきて我先にと食いつくが、今では人影も怖がらず養殖できるようなイワナになっているが、これは集団で養殖することによってそういう性格になっていく。本来の野性味はほとんど消えて、それを自然にかえすということで、放流しているが、徐々に自然では生きられないような遺伝子をもつイワナ、アマゴになりつつある。我々もだが、いつのまにか文明の中で生活していくうちに、人間も自然と共生できないような遺伝子を持つ体になってきているのではないかと、この頃、つくづく感じている。

- イワナの養殖を通じて、自然の大切さ、山や溪流を復活することの大切さ、そういうことを我々が考えながら、森の復活という目線からも考えていかななくてはいけないと思う。

【森の次世代育成：丸橋裕一（河辺いきものの森）】

（河辺いきものの森や、森の外での里山保育などで子どもたちへの自然体験や環境学習をされているが、こうした活動は現代の子どもたちにどういう意味があるか？）

- 河辺いきものの森は、里山の保全をNPO法人遊林会が担っているのので、子どもたちが安全に、楽しく活動できる環境となっている。
- 河辺いきものの森には年間18,000人程度の入場があるが、そのうち私たちスタッフが対応する団体利用者数が、年間約1万人、回数にして300回程度、4分の3以上が子どもたちの利用となっている。
- USJ（47ha）は、年間約1,500万人の入場者がある。USJは河辺の森の約3倍の面積があるので、同面積で換算しても年間500万人の入場となる。河辺いきものの森の団体利用者数の500年分。しかし、森に年間500万人も来たら、とんでもないことになる。それはもはや森ではない。
- 私たちは、来訪者数を増やすために森を活用しているわけではなく、森に来た人が、「森って楽しいな、また来たいな」と思ってくれることを第一に考えて受け入れを行っている。来訪者がそういう風に思うような質の高い利用をする上では、15haの森に年間1万人は、上限ではないかと思う。
- USJは、来場者数やリピーターを増やすために定期的に新しいアトラクションを投入したり、延々と設備投資し続けたいといけない。しかしこの森は、2002年のオープン以後、大規模な設備投資はしていなくて、基本的に森があるだけである。
- そういう中で、2002年以降、団体利用者がずっと年間1万人を下回ったことがないというのは、やはり今の時代には、森というものに価値を認め、そこで得られるものを必要とする人が多いということを示しているのだと思う。
- 一方で、今の子どもたち、あるいは大人たちは、整備された自然でないと安全でない・楽しめないと考えている人が多い。だから、学校で工作に使うドングリを拾ってきなさいという宿題が出されたら、大勢が河辺いきものの森のような整備された環境にやってくる。
- しかし、東近江市には、住んでいる近くにいっぱい身近な自然がある。そうした身近な自

然、たとえば里山や田んぼのあぜ道や神社の林でも、十分楽しいんだよ、面白いんだよ、ということ伝えるために、2015年から里山保育というのを始めた。

- 里山保育とは、保育園や幼稚園の近くにある身近な自然に、5歳児クラス年長組の子どもたちを、四季を通じて10回程度、私たちが連れて行き、自然の中でいろいろな活動をするというものである。一年に1園ずつ増やしてきており、今年は4園で実施中である。
- 室内でお話をして、探検カードを持って探検に行く、と基本はこれだけである。
- この里山保育は、自分たちの暮らしの圏内で活動する、というところに大きな意義がある。バスで2時間かかるすごく立派な森で1年に1回だけ活動するということも意義はあるが、里山保育は、自分たちが歩いて行ける距離にある普通の自然に、四季を通じて何度も出かけていくということが、大きな特長である。
- 東近江市は、身近なところに自然がたくさんあるが、今の子どもたちは、その自然とどう関わって良いのか分からない。だから、まずは楽しさを教えるわけである。それは、こうすれば楽しいよ、という教え方ではなく、子どもたちが本来持っている、「自分で楽しむ力」を引き出してあげるという方法である。
- たとえば、能登川ひばり保育園で初めて里山保育をした時のこと。この園は、すぐ目の前に猪子山があるので、そこで活動することにしましたが、初回、子どもたちに、山のどこまで行くと思うかたずねた。みんな、山頂まで行くと言ったが、いや、山すそしか行かないんだよ、と言うと、子どもたちは大いに不満。しかし、探検カードを持って、外で探検を始めたら、いつもなら通り過ぎるような道ばたからみんな動かない。一生懸命、何かを探そうとし、見つけたらすごく喜ぶ。2回目も同じで、そこから動かない。最初の入口さえサポートしてあげれば、子どもは自分で楽しむようになる。
- ちなみに次の日、その園はいつものように近くの公園までお散歩に行ったらしいが、いつもなら、さっさと歩いて公園に着いて、遊んで帰るのに、その日はみんな前に進まなくて、なかなか公園にたどり着かなかったそうである。道ばたのちょっとした草、そこにいる小さな生き物、そういうものに夢中になったからである。ちょっと自然を見る眼を持たせてあげるだけで、子どもは劇的に変わる。

(子どもの視点から見た森の課題)

- 子どもが森に入るときの課題は何か？4つある。
- 1つ目は、子どもが近寄れない森が多すぎる。これは森を使っていない、つまり手入れしていないからである。おまけに、大人は「森は危ないから行くな」と言う。それが最初の課題。
- 2つ目に、じゃあ子どもが森に行けるようにしてやろうとした時、「大人が考える子どもにとっての危険」を、子どもに押しつけすぎだ、ということである。「子どもが来るならきれいにしておいてあげないと」と、たとえば道ばたの草を全部刈る。確かに歩きやすくなります。でも、そこにあったクサイチゴや、バッタもみんないなくなる。もちろん、今にも倒れそうな木があったり、いつ落ちてきてもおかしくない枝がぶら下がっていたりしたら、

処理しておかないといけない。昔の子どもなら、そういうのを見たら経験的に「危ない」と知っているので大丈夫でしたが、残念ながら今の子どもは「危ないか危なくないか」の判断をするための経験が圧倒的に乏しい。だから、今は命に関わることはあらかじめ処理しておいてやる必要がある。一方で、「危ないか危なくないか」の判断をするための経験をさせることも大事。危険をすべて取り除こうとするのではなく、危険と出会った時、それにどう対処すべきかを教え、子どもが体験するということが大切。そういう余地を残した自然の使い方をすべき。

- 3つ目に、森の手入れを行う際、大人が有用と考える植物だけを残す単一的な管理をすべきではない。たとえばクサギ。漢字で書くと「臭い木」。鈴鹿ではシカも喰わないので、下草を食べ尽くされた森でもクサギは残っている。おそらく、森の手入れの際にもクサギは遠慮無く切られる木のひとつである。しかしこのクサギは、里山保育では重要な木である。クサギの名の由来を伝えずに、先入観無しで子どもにクサギのにおいをかがせると、いろいろな意見が出てくる。クサギは、自分で物事を考え、判断するというひとつの機会を提供してくれる。だから、いろいろな植物が生えていることが、森を活用する上での幅も広がる。
- 最後の4つ目。9月の台風21号は、河辺いきものの森にも大きな被害を与えた。これを契機に、森の管理を大きく変えようとしている。詳しく言う時間はないが、これまで、大きく育ってきた木は切らないことが正しい、という風潮があったが、そもそも里山は木を伐って、その切り株から生えてきたひこばえを育て、それがまた適度な太さに育ったらまた伐って…というサイクルを繰り返してきた林で、そういう場所だからこそ里山の生き物、たとえばカブトムシやクワガタがすんでいた。しかし、今はそのサイクルがとまり、里山も公園のような管理になってしまっている。つまり、折れた木は伐採し、その場から撤去して、元の風景に近い形に戻すというような管理。そうではなくて、森を若返らせ、次の世代の森を作るために、思い切って大きくなりすぎた木を伐っていく、里山の場合はそういうことが必要。大きな木が無くなると、見慣れた風景は一変する。河辺いきものの森のような公共的な場所だと、それによって大いに非難されるかもしれないが、次の世代の森を作るため、今それをしないとけないということを、多くの人に理解してもらいながら、進めていく必要があると考えてる。これは、国内の里山保全で画期的な試みになる。

【エコツーリズム：今井康太郎（鈴鹿10座エコツアーガイドクラブ）】

（鈴鹿10座エコツアーガイドクラブについて）

- 「鈴鹿10座エコツアーガイドクラブ」は昨年9月～11月にエコツーリズム推進協議会主催のガイド養成講座（10講座）修了者により今年4月に発足。
- 単に山登りのサポートをするだけでなく、地域に還元できる活動を目指す。
- 整備・保全・巡視・相談・調査・収益の6つの業務を柱に活動。
- 【整備】：登山道の風水害による、倒木処理、崩落個所の修理と安全対策。春はSTS開催

のため天狗堂、秋は竜ヶ岳の太尾コースをメインに。

- 【保全】：御池岳の獣害対策としてのネットの設置、風雪による倒壊防止のためのネット下げ。銚子ヶ口の「ササユリ」、「アカモノ」の保護。
- 【巡視】：登山道の危険個所の点検、調査（10路線）。
- 【相談】：4月～6月、9月～11月の土休日に道の駅の二階（旧音楽室）のビジターセンターで登山届提出等安全登山の指導、登山道の情報提供・収集。
- 【調査】：春1回、秋2回、登山口の入れ込み調査。
- 【収益】：イベントのガイディング4回、スマイルネットのプロモーションビデオ撮影5回。

（鈴鹿10座の魅力）

- 鈴鹿山脈 山国の日本でも「山脈」と呼ばれるのは非常に少ない。近畿では鈴鹿だけ。
- 地質も大きく分けて藤原岳以北の石灰岩、竜ヶ岳以南の花崗岩に分割され、それぞれに違った特徴が見られる。
- 花については「花の百名山」に選ばれている藤原岳に代表されるように「福寿草」「カタクリ」等石灰岩に咲く花、「シロヤシオ」「ドウダン」等花崗岩に咲くツツジ科の花。
- 水質についても、石灰岩の御池川、花崗岩の神崎川、両方がブレンドされた茶屋川。
- 千草越え、八風越え、治田越え等の歴史街道
- 御池鉱山、よもぎ谷鉱山等多くの鉱山が点在している。
- 落葉広葉樹も多く、春の新緑、秋の紅葉、初冬の落葉、冬の霧氷等四季折々の景色がみられる。

（森の課題）

- マザーレイク琵琶湖にそそぐ愛知川の清流を取り戻すため、ファーザーフォレスト鈴鹿の山に天然のダムと言われる保水力の強いブナなどの木々を育てる。
- 日本遺産認定後、郷土料理を召し上がる方が増えた→漁萬膳プロデュース ¥3500。
- 昔は4軒あった料理屋も、今は魚定1軒になった。
- コイ、モロコ、ワカサギ、ウグイ、ナマズ、フナ、ビワマス、アユ、ハス、ウナギなどを使った料理を提供。魚は漁業組合・問屋から仕入れている。
- 最近、以前は少なくなっていたワカサギが多くなり、逆に他の魚が少なくなってきた。

セッションⅡ 「これから」森づくりを検討する際の視点

【話題提供：水田有夏志（「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ）】

- こうした課題を解決し、東近江市の特性を活かした森づくりを進めていくため、「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループを今年の1月に立ち上げ、関係者が集まって議論しながら、いろんな取組みを進めている。
- このワーキングのミッションは、まず、東近江市の今後100年に向けた森づくりビジョンの策定、もう一つのミッションとして、ビジョンの策定を待って動き出すのではなく、できることから始めようということで、「鈴鹿の森おこし」を推進する実践活動として、「あ

らゆる場面に木を使うプロジェクト」と「東近江市らしい新たな森づくりプロジェクト」にも取り組んでいる。

- 森づくりビジョンのスタンスとして、地域（ローカル）の視点で森林・林業を考えようということ。国や県任せではなく、目の前の森林の課題は、それをいつも見ている地域の人達が、自分たちでどうするのかを考えていくべきではないかということ。
- 次の 100 年先の未来を見据えたビジョンづくり。100 年先を見通すことが難しいが、森づくりはその時々々の社会経済情勢だけに振り回されるのではなく、百年の計を持って、地域の人達が思いを引き継いでいけるような仕組みが必要。
- 次にプロセスの重視と柔軟な対応。ビジョンの策定や実践活動を行う場合、その過程、プロセスを重視することによって、「自分ごと」として捉えてもらう。また、国や県の政策にありがちな同時的、均一的な進め方、あるいは一度決めたら変えにくい、硬直した進め方ではなく、地域の実情や状況の変化に応じて柔軟に対応していくことが重要。
- 東近江市の特性であり、強みでもある森・里・川・湖のつながりを活かして、例えばエコツーリズムなどの取組を発展させながら、水の流れやモノの移動のつながり、人と人とのつながりの復活を目指した森づくりを実践していくことが必要。
- 最後に、森林・林業＋X（エックス）。これは木材生産など、従来型の森林・林業だけではなく、登山やエコツーリズム、教育や福祉、医療まで含めたあらゆる可能性、あらゆる価値をエックスとして付加して、森づくりに積極的に活用していこうという考え方である。
- 森づくりビジョンを推進していく仕組みとして、東近江100年の森づくりワークショップを考えている。

【森の生き物：山崎亨（びわ湖の森の生き物研究会）】

- 日本は先進国の中で、森林率はダントツで、今も 70% ぐらい。こんな国はない。
- 他の先進国、開発途上国は必死になって森林を増やそうとしている。
- 日本は地理的にも、環境的にも恵まれて、森林資源というものが豊富にある。そのおかげで日本文化というのが育まれてきたし、日本というのがあると思う。
- この素晴らしい価値を見直す必要があると思っている。激変した今の状態というのは、わずか 60～70 年のこと。
- 日本の歴史はすごく長い歴史があり、その中で日本人や文化というものが育まれてきた。
- この素晴らしさをきっちりと評価する。森林、山が持っている潜在的な資源力を、再評価を必ずしなければならないと思う。そうでないと日本は再生しない。
- 価値を見直すことと、教育。
- 何よりも当然林業が基本であり、今の炭焼き等が無くなった現状では、新たな価値を見出す。
- 人が山に関心を持つ、人が山に入らないといけない。その中で、資源であるという風に浸透して、また人が山の中に入ってくるということが、活気をもたらす突破口になるのかな

と思う。

【溪流と森：池田則之（愛知川上流漁業協同組合）】

- 50年かけて我々の先祖が、我々のこと、子や孫を思って、山を作ってきた。
- たまたま結果がこういう状況になって、今は弱っているような状況だが、我々もこれから50年かけてやってダメだったことを100年かけて直していかなければ。
- 当時、先祖の方が我々のことを思ってやってくれたことを、我々は、我々の子どもや孫のことを思ってやらなければいけないと思う。
- 今の個人主義というものが、結構、山にも入ってきているのではないかと思う。
- うちにはたまたま子供が継いでくれるので、孫にも教育しようかなと思っている。

【森の次世代育成：丸橋裕一（河辺いきものの森）】

- 次世代育成ということで、教える人を作っていく必要がある。
- 昔はたけた人がいて、他の子ども達に色々と教えて、こういうやり方ひとつをとっても教えていた。
- 今は子どもたちのつながりがなくなっている状況で、大人なり、色々な人が子どもに伝えていけないといけない。
- 500年後にUSJがあるかといえば、多分ない。河辺の森は多分あるだろうと。自然というのは強み。長いスパンで物事を見ていく必要がある。
- 愛知川を取り戻すという仕事もやっている関係で思ったが、昔のことを覚えている人が沢山いる。例えば愛知川は良く水が切れるが、水が切れたときにあそこに魚が良く溜まってきたなとか。楽しかったことを覚えているからそういうことが言える。そういう人は、最近魚が溜まらなくなったという話をされる。
- 楽しかったことを覚えているから、今がおかしいな、どうなっているのかという発想になってくる。
- おかしいなと、どれだけの人が思えるか。それには、昔に比べておかしいなという風になってくるわけで、やはり今のデータベースだけではなく、自分の体験、昔のことに比べて少し最近おかしいぞと言える人を増やしていかないと、自然というものは長く守れないのかなと思う。
- そういう意味で、淵に溜まった魚をつかみ放題ですごく楽しかったというのはすごく大事なことなので、森を通じても、森に入って楽しかったなという子どもをどんどん育てていくことが長い目でみたらとても大事なことなのではないかと思う。

【エコツーリズム：今井康太郎（鈴鹿10座エコツアーガイドクラブ）】

- 愛知川をきれいにしたい。きれいな川は、きれいな森がつくる。鈴鹿の山を針葉樹から広葉樹にしたい。自然の力で清流の川にしていきたい。昔のような広葉樹の山

にしていきたい。

【森林管理者：落部弘紀（東近江市永源寺森林組合）】

- まずは森づくりよりも、地域に人を定着させ、森に関わる人を定着させることが必要。
- 東近江市は新たな価値観を持っているという魅力がある。その新しい価値を発信することで新しい人が入ってくる可能性がある。

【森林所有者：川嶋富夫（東近江市箕川町）】

- 境界確定のデータをはじめ人工林、天然林の管理は森林組合に任せる。
- 人工林の中にも良いものはある。良いものを残して、良い時期に切って、搬出していく。良いものをつくる基本にかえることが必要。

【提案者：水田有夏志（「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ）】

- 目に見える具体的なイメージのつく範囲でワークショップを行い。林業、子ども、後継の視点など多様な視点を考慮して、具体的な森づくりの話し合いを行う。

参加者全員による意見交換会

地域の森づくりのために「自分に何ができるのか？」

発言者 1

- 森林所有者というほどのものではなく、4反ほどの棚田だったところに、父が木を植えて、それが30～40年前で、一度も間伐をしたことがなかったので、私一人で木を切って、ログハウスを作ろうとやっている。
- 木を1本倒すことが結構面白く、ボーリングでストライクを出したような感じ。木を切ることで自分が面白くなってしまっている。グループに何人かいて、山に来るのが楽しいということでも来てくれる。
- みなさんも一度、そういう経験をしてみたら。木を切ることが面白い。さらに切った木で何かを作るとするのが良い。

発言者 2

- 先ほど話していた中に、愛知川流域に住んでいる方がおられたが、永源寺の山のイメージがつきにくいという話が出ていた。イベントでは行ったことがあるが、普段の生活とリンクしづらい。道が新しくできたので、近づきやすくなってきたが、なかなか行くことができないという話があった。
- 私は遊林会なので、子どもの方の視点になるが、人と自然をつなげるのが大事だと再確認し、自然とつながっているのだと子どもに伝えるのが大事かなと思った。自然を守らない

といけないと思わせるのではなく、子どもに自然って面白いな、不思議だなと思わせることにもっと力を入れたいと思う。自然が好きだからここにきているというのが最終目標だが、子ども自身が好きになるきっかけをつくる場になればと思う。

発言者 3

- 私の町は約1,000haほどの山があり、以前は下草刈り、枝打ちなどをしていた。自分に何ができるのかと、地域の森づくりというのは、私らのところは森林だと。森となると、先ほどの河辺の森などで、森林となると、今の120軒の在所があるが、若い息子たちは都会へ行ってしまう。そうすると山も知らない、守りもできない。私たちが若い頃は、山へ下草刈りをしに行っていたが、それは一切しない。自分の子どもに家を継げと言っても、継がない。結局、1,500人いた住民が、300~400人ぐらいになった。池田さんのイワナの養殖所も将来的には人がいない。私の周りも老老介護となっている。それで山を守れと言われてもできるわけがない。
- 自分に何ができるのかということで、自分の子どもに家を継げと。まず家を継いで、家から出るな。嫁をもらい、孫を作り、小さい頃からそういう教育をしないと、限界集落が下へ降りてきたと。
- 田んぼが20haあるが、シカ、イノシシに荒らされる。フェンスを設けているが、それでもやってくる。そうすると若い子どもたちは外へでる。
- 森づくりというよりも、深刻な問題は、若者がいないということ。これは行政も力を入れてもらって、家族、親も頑張って子どもを地元に残めると、そういう時代が来てほしい。

グループ 1

- 地域材で椅子や机を作り出したいがどこに頼んでよいかわからない。
- 無知は怖い。
- 子供と森は良い関係にする必要がある。
- イワナだけでなくアユのDNAも心配。
- 中山間は獣害が多く維持が難しい。

グループ 2

- 植林しても何もしていない、山に入っていない、まずは山に入るのが大事。
- 山の仕事は大切、人が山に入る仕組みづくり（登山、溪流釣りなど）。
- 山を継承する。

グループ3

- ゾーニングが大切、機械的にゾーニングするのではなく、具体的にこういう場所にはこれと話し合う。
- 山に入って昔はどういう山だったのか話を聞くことが大切。
- 愛知川流域に住んでいるが、永源寺の山となるとイメージがつきにくい。
- イベントでは行ったことがある普段の生活とリンクしづらい。
- 道が整備されてきて近づきやすくなった。
- 川と山が結びつくきっかけが大切。
- 子供にこれって木でできた紙なんだと気づかせることが大切。
- 人と自然をつなげる。
- 自然を守るだけではなく、子供に自然って、面白いや不思議やと伝える。
- 自然が好きだから守りに来ている人を増やす。
- 子供に自然を好きになるきっかけをつくる。
- 子供に里山だけでなく奥山の面白さも伝える。

グループ4

- 先進国で森林率は断トツその価値を見直すべき。
- 教育が大切、人が山に関心を持つ、山の役割を親から子へ引き継ぐ。
- 長いスパンで森を見ていく楽しさを持つ。
- 森の機能を活かす。
- 森に出会うことでの変化、その機会をしくみにする。

グループ5

- 山に行くのを楽しむ。
- ガイドづくり。
- 里山よさを伝える。
- お金を落とす仕組みづくり。
- 階段など入りやすくしておく。



オリエンテーションの様子



司会 株式会社 農楽 西村俊昭



書記 東近江協働ランドテーブル運営委員会 竹内清臣



話題提供、セッションの様子



意見交換会の様子



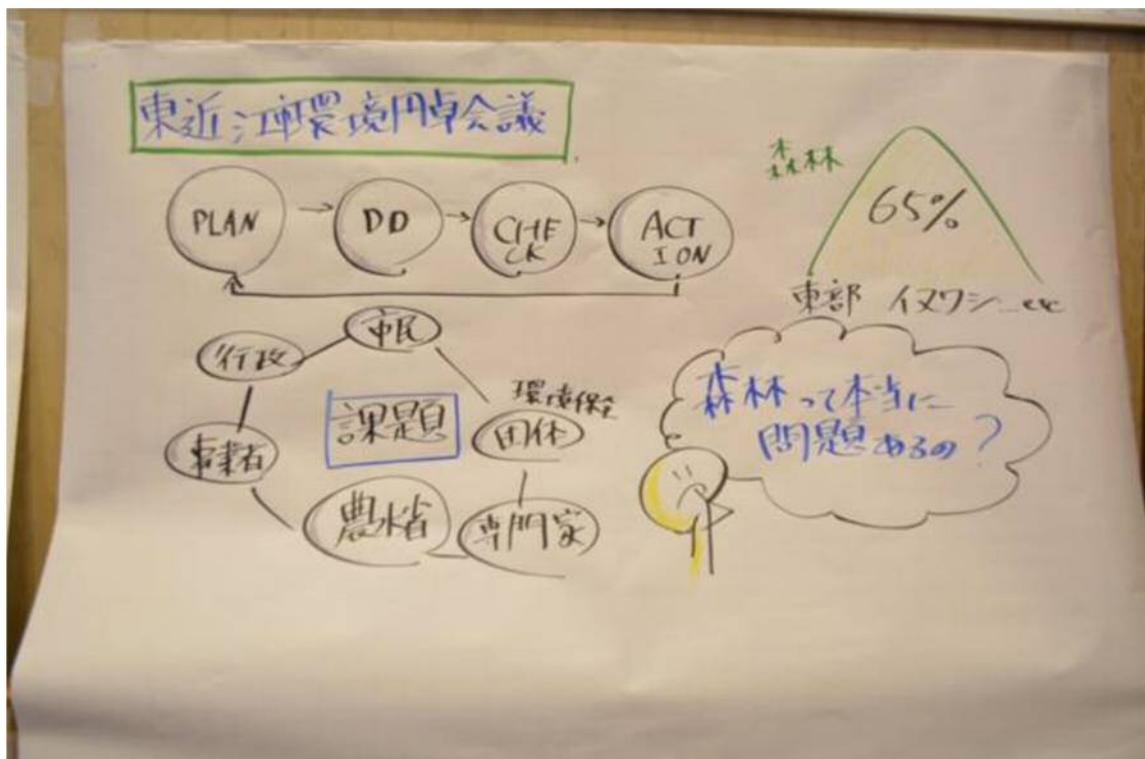
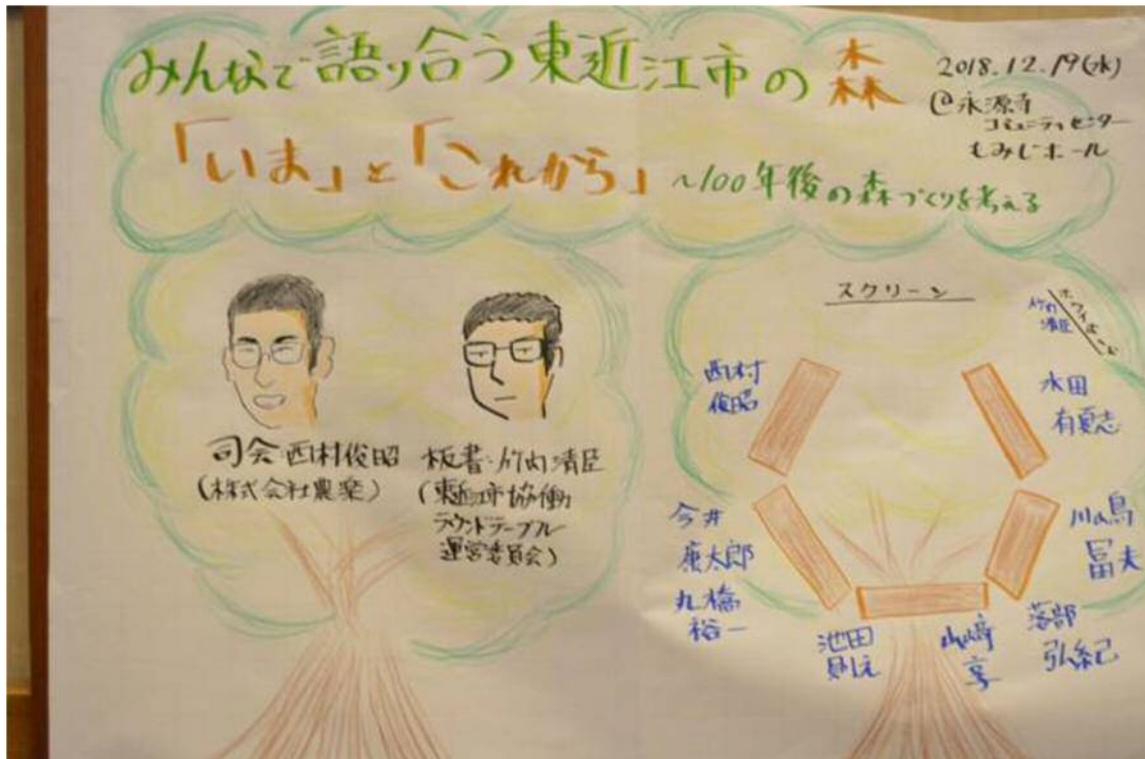
セッションの様子

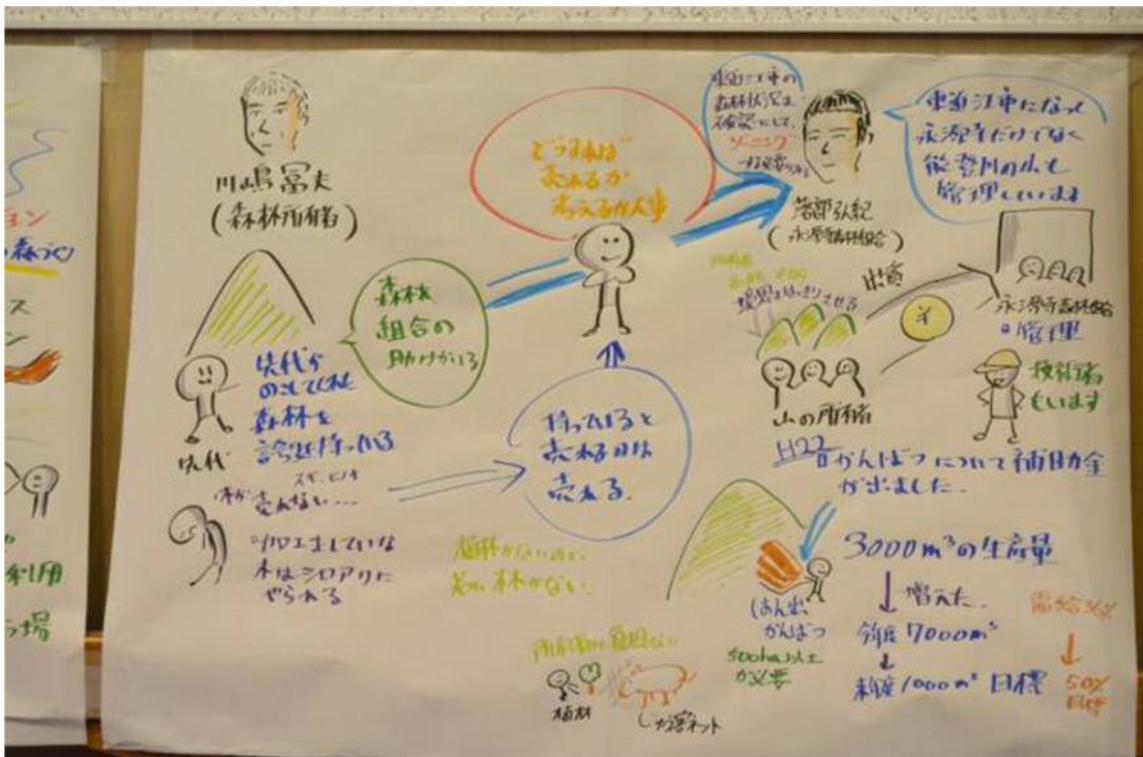
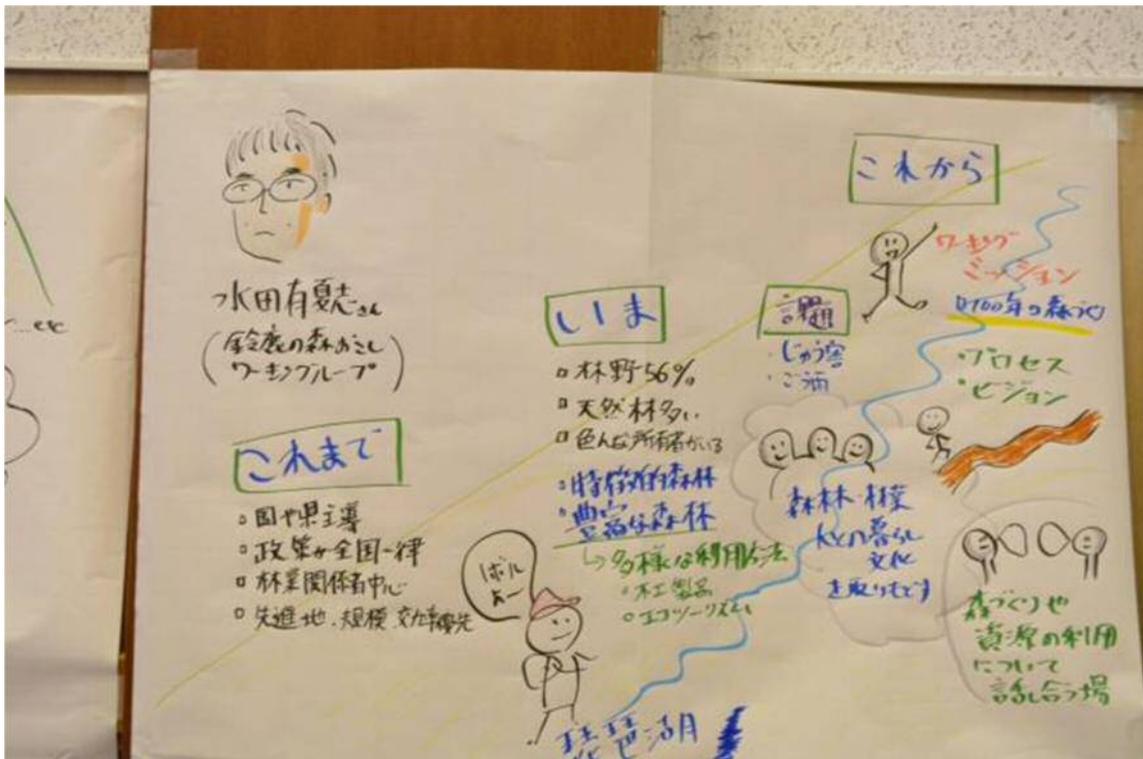


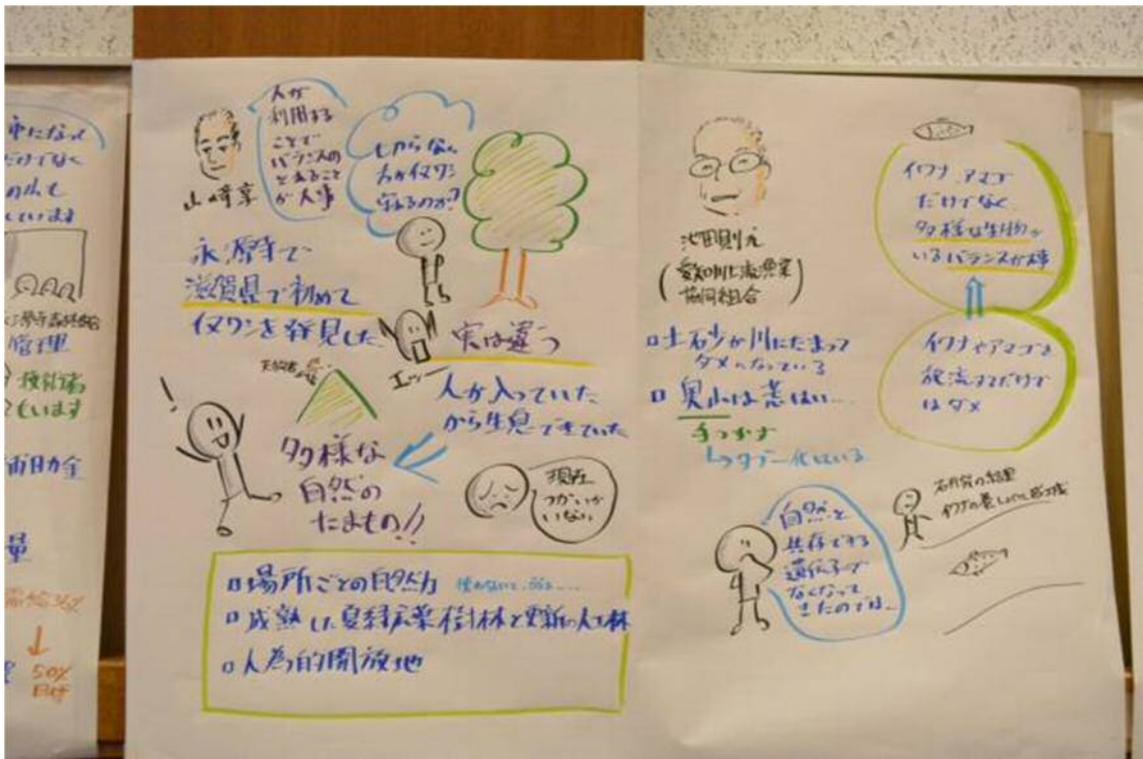
意見交換会のグループ発表の様子

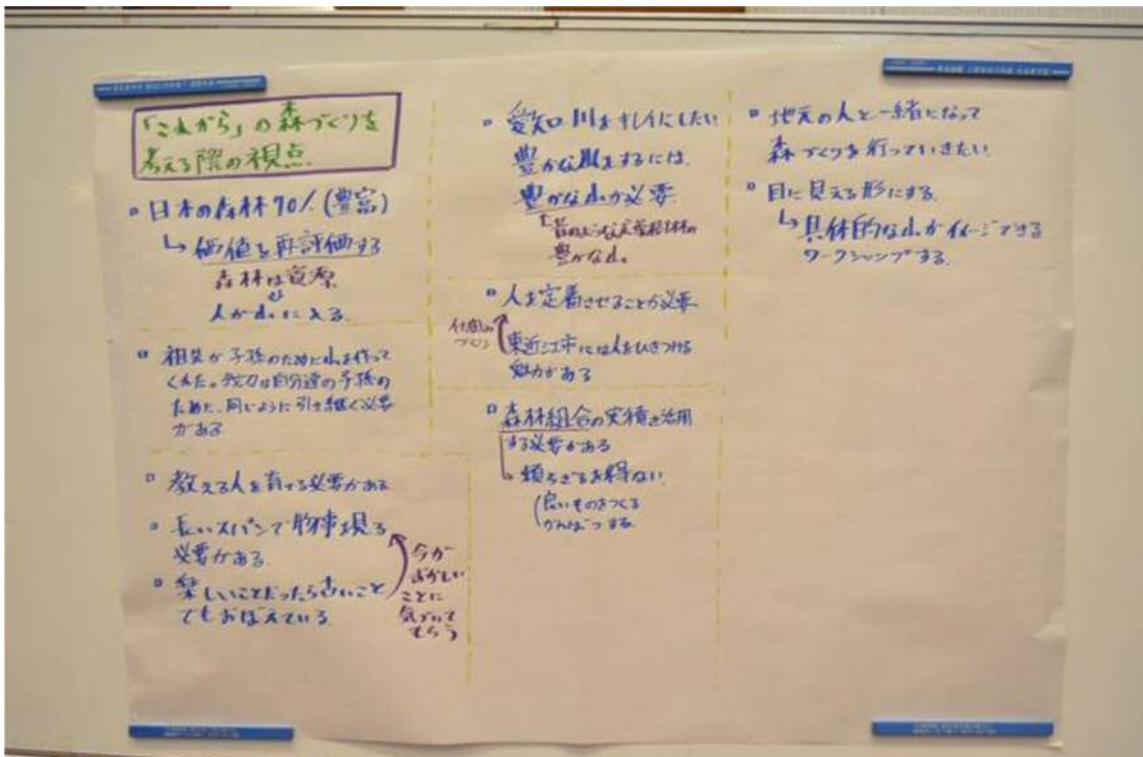
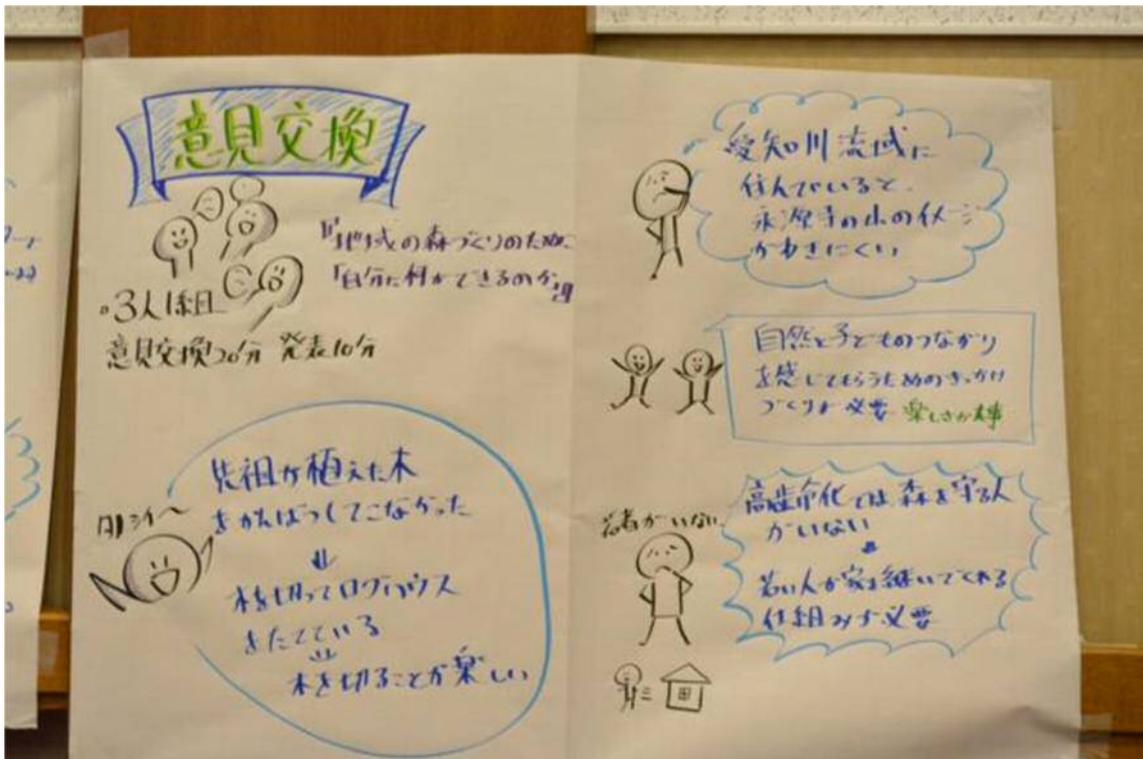


ふりかえり











大地から感じるあふれるエネルギー。木々の間を通りぬける心地よい風の息吹。私たちは、今でも森からたくさんの恵みを受けています。

人が森に入らなくなり数十年。昔は、暮らしの身近にあった森が、今もとても強い存在になりつつあります。

今、森は小さな声をあげています。その声を聴き、次の世代へ残したい「東近江市の森」を関係者と共に考えてみませんか。

「子どもたちが笑顔になれる
豊かな森」

12 / 19 (水)
19:00 ~ 21:30

東近江市環境円卓会議 第2弾
みんなで語り合う東近江市の森
「いま」と「これから」
～ 100年後の森づくりを考える～

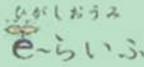
東近江市の面積の56%を占める森林は、本市の地域資源として重要です。地域の東部に広がる森林は「鈴鹿国定公園」に指定され、イヌワシやクマタカが生息する豊かな自然があり、木地師発祥の地として古くから森林文化を育んできました。

また、鈴鹿山脈や里山の多くは、人と関わりながら育まれてきました。しかし、ライフスタイルの変化に伴い、森林を取りまく環境は大きく変化してきています。そこで今回、地域の森林に関わる様々な人に集まってもらい、東近江市の森林の現状と今後の可能性を考える東近江市環境円卓会議を開催します。円卓会議では、森林所有者、森林組合、森の生き物の専門家、漁業組合、ツアーガイド、行政などの関係者がそれぞれの立場で語り合い、森の現状と可能性を参加者の皆さんと共有し、今後の森づくりの視点を探ります。

会場
永源寺コミュニティセンター
もみじホール

住所 東近江市山上町 1316 番地

入場無料 申込不要



主催：東近江市環境円卓会議 運営委員会
鈴鹿の森おこし推進ワーキンググループ
共催：東近江市

お問合せ：東近江市生活環境課
TEL：0748-24-5633
IP：050-5801-5633





司会：西村俊昭
(株式会社農楽)



書記：竹内清臣
(東近江協働ラウンドテーブル運営委員会)



テーマ提案(10分)



水田 有夏志
「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ

- 東近江市の森
- 「これまで」「いま」「これから」

セッション1 森の「いま」を知る(70分)

- 森林所有者：川崎 憲夫 (東近江市鏡川町)
- 森林管理者：落部 弘紀 (東近江市永源寺森林組合)
- 森の生き物：山崎 亨 (びわ湖の森の生き物研究会)
- 渓流と森：池田 訓之 (愛知川上流池田協同組合)
- 森の次世代育成：丸橋 祐一 (河辺いきもの森)
- エコツアーリズム：今井 康太郎 (鈴鹿10里エコツアーガイドクラブ)

意見交換(意見交換20分、発表10分)

- 3人1組
- 地域の森づくりのために「自分に何ができるのか」について話し合い

セッション2 「これから」の森づくりを考える際の視点(15分)

100年後の森づくり

ふりかえり(15分)



東近江市環境門草会議 第2弾
みんなで語り合う東近江市の森
「いま」と「これから」
～100年後の森づくりを考える～

12/19
10:00-11:30

東近江市環境門草会議
東近江市環境センター
1001室

テーマ提案(10分)



水田 有夏志

「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ

- 東近江市の森
- 「これまで」「いま」「これから」

セッション1 森の「いま」を知る(70分)

- 森林所有者：川嶋 富夫（東近江市箕川町）
- 森林管理者：落部 弘紀（東近江市永源寺森林組合）
- 森の生き物：山崎 亨（びわ湖の森の生き物研究会）
- 溪流と森：池田 則之（愛知川上流漁業協同組合）
- 森の次世代育成：丸橋 裕一（河辺いきものの森）
- エコツーリズム：今井 康太郎（鈴鹿10座エコツアーガイドクラブ）



森林所有者

川嶋 富夫
(東近江市箕川町)

- ①所有している森林の状況について
- ②制約条件がなかったら山をどのように管理したいですか
- ③その制約条件や今後の森林管理の課題について



森林管理者
落部 弘紀
(東近江市永源寺森林組合)

- ①永源寺森林組合とは
- ②理想とする森づくりは
- ③現在の取組について
- ④森林管理の課題



森の生き物

山崎 亨
(びわ湖の森の生き物研究会)

- ①鈴鹿の山と生き物の変化
- ②イヌワシ、クマタカが生息する森とはどんな森
- ③イヌワシ、クマタカの生息における鈴鹿の森の課題



溪流と森
池田 則之
(愛知川上流漁業協同組合)

- ①鈴鹿の山と溪流の変化
- ②イワナ、アマゴが生息する溪流を育む森とはどんな森
- ③イワナ、アマゴの生息における鈴鹿の森の課題



森の次世代育成
丸橋 裕一
(河辺いきものの森)

- ①河辺いきものの森や、森の外での里山保育などで子どもたちへの自然体験や環境学習をされているが、こうした活動は現代の子どもたちにとってどのような意味があるか？
- ②子どもの視点から見た森の課題



エコツーリズム
今井 康太郎
(鈴鹿10座エコツアーガイドクラブ)

- ①鈴鹿10座エコツアーガイドクラブの活動
- ②エコツーリズムからの鈴鹿の特徴や良さ
- ③エコツーリズムを推進における森の課題

意見交換(意見交換20分、発表10分)



- 3人1組
- 地域の森づくりのために「自分に何ができるのか」について話し合い

<< 意見交換 テーマ >>

地域の森づくりのために 「自分に何ができるか」

セッション2 「これから」の森づくりを 考える際の視点(15分)

- 森の生き物：山崎 亨（びわ湖の森の生き物研究会）
- 深沢と森：新田 則之（愛知川上流漁業協同組合）
- 森の次世代育成：丸橋 裕一（河辺いきもの森）
- エコツアーリズム：今井 隆太郎（琵琶湖10区エコツアーガイドクラブ）
- 森林賞徳者：旗部 弘紀（東近江市永源寺森林組合）
- 森林所有者：田嶋 富夫（東近江市箕川町）
- 提案者：水田 有聖志（「緑の森おこし」推進ワーキンググループ）

ふりかえり(15分)





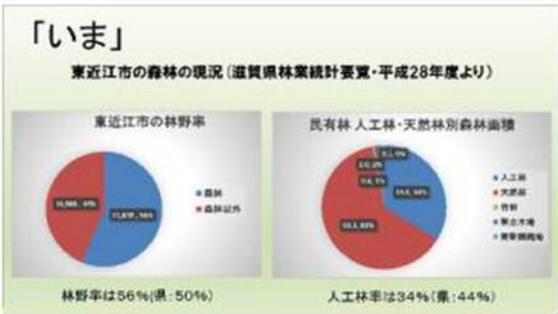
「これまで」
これまでの森林・林業行政はどうであったか

「いま」
東近江市の森林・林業の現状と課題

「これから」
東近江市の今後100年の森づくりに向けて

「これまで」
これまでの森林・林業行政

- ・国や県が主導してきたこと
森林法、森林計画制度、林野3公共、琵琶湖森林づくり基本計画
- ・政策が全国一律であること
拡大造林政策→環境保全重視→林業成長産業化
- ・林業関係者を中心として進められてきたこと
林野庁、都道府県森林部局、森林組合
- ・先進林業地、規模や効率を優先してきたこと
補助金の採択基準、目標数値(素材生産量)



「いま」

東近江市の森林・林業の課題

<現場の課題>

- ①成熟しつつある人工林資源を有効利用していく必要があること
- ②獣害や豪雨等により劣化した森林を回復し、自然環境や生物多様性の保全に配慮した森林づくりを進めていく必要があること
- ③森・里・川・湖のつながりなど、東近江市の森林・林業の特性を活かしていく必要があること

木材の伐採・搬出
手入れがされていないヒノキ林
オオイトケヤクメグツのシガ食害
森・里・川・湖のつながり(大船山山より)

「いま」

東近江市の森林・林業の課題

<現場の課題>

- ④一方通行の流れ(大型工場への需要)だけではなく、地域でモノ(資源)やカネ(資金)が回る仕組みを作る必要があること
- ⑤森林・林業と人の暮らし・文化との関係を取り戻す必要があること
- ⑥子どもたちや一般市民が山に入り、自然への理解や生きる力を育む機会を増やしていく必要があること

合板工場、木材や資金の流れが一方通行。
かつては多くの人が夏休みのために山に入っていた。
森林環境教育、子どもたちが山に入り、自然の仕組みを学ぶ機会。

「いま」

東近江市の森林・林業の課題

<システム的な課題>

- ①国や県だけに頼らず、地域の実情に応じた森林政策を地域主導で進めていく必要があること
- ②従来型の森林・林業(木材生産)だけではなく、多様な考え方を取り込んでいく必要があること

「これから」

「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループ

<ワーキングのミッション>

ミッション①
「(仮称)東近江市・100年の森づくりビジョン」の策定
※ 第2次東近江市環境基本計画 重点プロジェクト4「100年の森おこし」ビジョンの作成
ミッション②
「鈴鹿の森おこし」を推進する実践活動
○あらゆる場面に木を使うプロジェクト
○東近江市らしい新たな森づくりプロジェクト

あらゆる場面に木を使うワークショップ
新たな森づくりワークショップ
環境係計画

「これから」

今後100年の森づくりに向けた考え方

※ 「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループでの議論より

<森づくりビジョンのスタンス>

- ①地域(ローカル)の視点で森林・林業を考える
国・県主導の森林・林業政策だけではなく、いつも森林を見ながらその課題を実感している地域の人々が自らビジョンを作るとともに、森林づくりや資源利用などに参画していく。

「これから」

今後100年の森づくりに向けた考え方

※ 「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループでの議論より

<森づくりビジョンのスタンス>

- ②100年先の未来を見据えたビジョンづくり
100年先を予測することは難しいが、地域の森林に関わる人々がその夢や思いを語り合い、次の世代にも引き継いでいけるような仕組みを作りあげていく。

「これから」

今後100年の森づくりに向けた考え方

※ 「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループでの議論より

<森づくりビジョンのスタンス>

- ③プロセスの重視と柔軟な対応
ビジョンの策定や実践にあたり、プロセスを重視することにより「自分ごと」として捉えて参画する機運を醸成。同時的、均一的な進め方ではなく、地域の実情を踏まえた柔軟な進め方により、森林の質の向上や資源の有効な活用につなげていく。

「これから」

今後100年の森づくりに向けた考え方

※ 「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループでの議論より

<森づくりビジョンのスタンス>

- ④森・里・川・湖のつながりを活かした森づくりの実践
東近江市の森・里・川・湖のつながりを活かしたエコツーリズムをはじめとする取組を発展させるとともに、水の流れのつながり、モノの移動のつながり、人と人のつながりの復活を目指した森づくりを展開していく。

「これから」

今後100年の森づくりに向けた考え方

※ 「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループでの議論より

<森づくりビジョンのスタンス>

- ⑤森林・林業+X(エックス)
山や森林に関わる多様な主体が、木材生産など従来型の森林・林業の枠だけではなく、エコツーリズム、観光、健康福祉、教育など新たな価値(Xエックス)を付加し、積極的に活用していくことにより新たなビジネスとして成長・発展させていく。
森林・林業+X(エコツーリズム、観光、健康福祉、教育…?)

「これから」

今後100年の森づくりに向けた考え方

※ 「鈴鹿の森おこし」推進ワーキンググループでの議論より

<森づくりビジョン推進の仕組み>

東近江100年の森づくりワークショップ
地域住民が課題を実感できるエリアで、将来に向けた森づくりや資源の利用について話し合う場。

「これから」

本日のセッション

★セッションⅠ
東近江市の森林にさまざまな立場で関わっておられる方々から、それぞれのテーマに基づき、東近江の森の「これまで」、「いま」、「これから」について情報提供していただく。

★グループでの意見交換
今後、森づくりを検討する観点について意見交換

★セッションⅡ
登壇者により今後、森づくりを検討する観点について意見交換

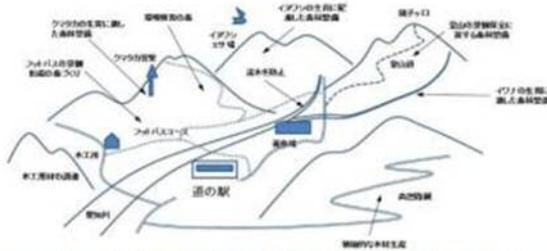
「これから」

東近江100年の森づくりワークショップ

地域住民が課題を実感できるエリアで、将来に向けた森づくりや資源の利用について話し合う場

本日の議論を踏まえ……

今後、地域ごとに、例えば「道の駅 奥永源寺渓流の里」から見える範囲の森をどうしていくのかについて、ワークショップ形式で議論し、森づくりの実践をしていく。



今後100年を見据えて、道の駅から見える森林をどのようにしていくのか……？
(話し合い・現地検討 → ゾーニング)

ご参加の皆さんの積極的な議論をお願いします。



みんなで語り合う東近江市の森「いま」と「これから」
～100年後の森づくりを考える～



生物多様性に富む鈴鹿の森
植物の種類は1800余(伊吹山1000)

- ① 北日本と南日本の両方の自然環境要素がある
- ② 日本海側気候と太平洋側気候が入り混じる
- ③ 地形が複雑で、多様な地形が存在している
- ④ 人々が森林資源を持続的に利用すべく、多様な管理を行ってきた

鈴鹿山脈にはさまざまな野生動物が生息している

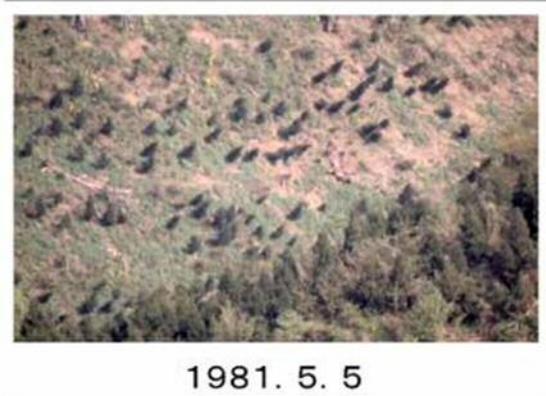
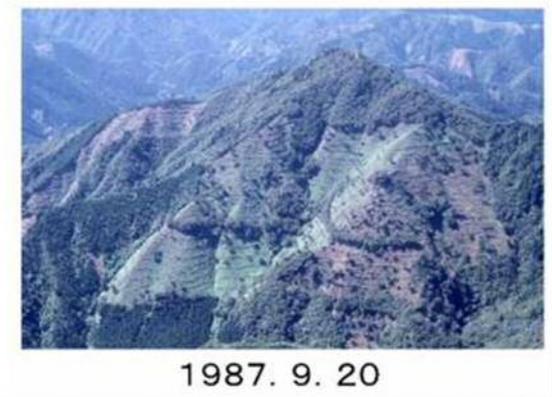
イヌワシとクマタカは東近江市の森の守り神



多様な森がイヌワシを守ってきた!

- 自然開放地(夏)
- 成熟した夏緑広葉樹林(冬)
- 森林のギャップや林縁部
- 人為的開放地(伐採・炭焼き・茅刈り・採草)







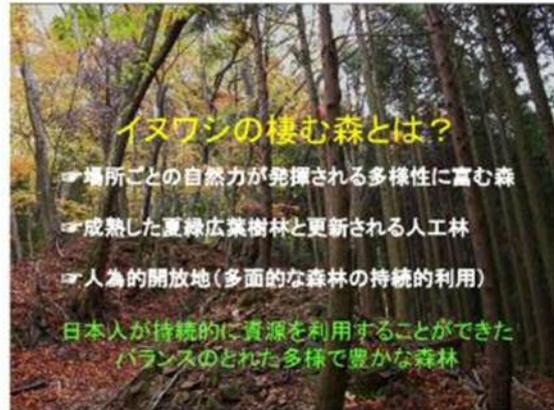
1982. 2. 28



失われる茅刈り場、焼畑地



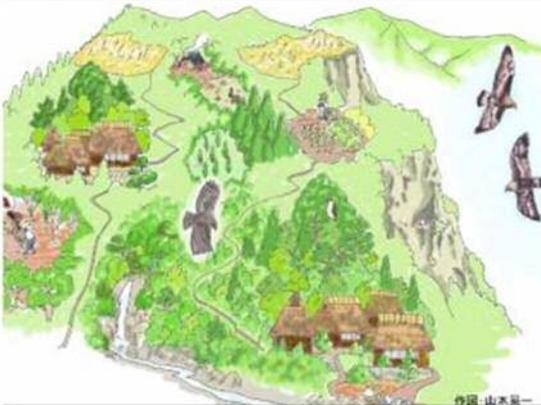
手入れのされない放置人工林の急増



イヌワシの棲む森とは？

- ⇒場所ごとの自然力が発揮される多様性に富む森
- ⇒成熟した夏緑広葉樹林と更新される人工林
- ⇒人為的開放地(多面的な森林の持続的利用)

日本人が持続的に資源を利用することができた
バランスのとれた多様で豊かな森林





河辺いきものの森

スタッフが対応する
団体利用者数は、
年間約10,000人
(約300回)
4分の3以上は子どもたち

ユニバーサルスタジオジャパン
年間約15,000,000人

USJの面積は河辺の森の約3倍
→ 5,000,000人/年

河辺いきものの森の
500年分！



「里山保育」 (2015年度より)

保育園や幼稚園等の近くにある里山に、四季を通じて10回程度、河辺いきものの森の職員が園児を連れて行き様々な活動を行う。1年に1園ずつ増やして実施してきており、現在は公立4園(約150人)で計44回実施中。



室内でお話をして子どもの気持ちを盛り上げ、「探検カード」を持って探検に出かける



能登川ひばり保育園の里山保育 (2016~)

園から約30秒の猪子山にて



第1回目 2016年4月20日(水)
春の森をたんけん

第2回目 2016年6月1日(水)
初夏の森をたんけん

